

浄土

十二月号

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和十四年四月二十八日 運輸省（特別扱承認雑誌第三五二号）
昭和十四年十一月二十五日 印刷 昭和十四年十二月一日発行



法然上人鑽仰会

第三十五卷

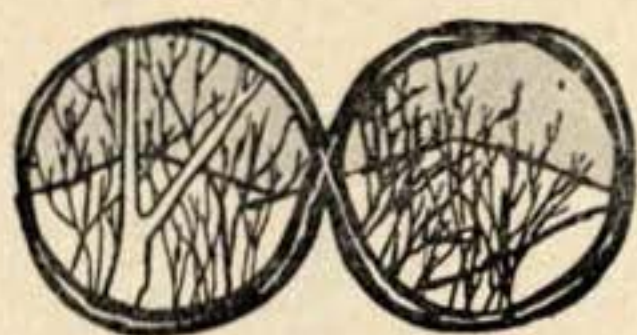
第十二号



目 次

表紙「北海」松濤達文画

断絶を超えた世界—おさとりの日におもう—	高 松 誠 戒	(2)
一枚起請文と浄土信仰 (上)	香 月 乗 光	(5)
女子実践仏教に参加して	小菅和子・沢 朱実	(8)
十二因縁⑫生死をはなる (老死)	渋谷 賢 応	(11)
法然上人二十五霊場をめぐりて⑤	村 上 博 了	(12)
シルクロードとコーカサスへの旅日記⑦	佐 藤 治 子	(18)
開教余談 山のおやじ	島 津 登 也	(24)
読者だより	上野山瑞光・吉田勇之助・水谷大成	(28)
ひとくち伝記⑫岩井門主のステッキ	高 橋 良 和	(30)
編集後記		(33)



今月のことば

晩秋の冷気がしみじみと感ぜられるこの頃の季節である。いまごろの時季を迎えることに、禅林でおこなわれている臘八接心に参加した往時のことが懐しく思い出される。臘八とは、いうまでもなく臘月八日のことで、お釈迦さまが成道された日の十二月八日をいうのである。禅寺では、本月一日から八日までの間、臘八接心といって、お釈迦さまのお悟りを開かれたのを記念して、種々の行事をとりやめて、昼夜を通して坐禅をおこない、ちやうど暁の明星がきらめくころ割然とお悟りを開かれた故事にならって、八日の暁がたにいたり、出山釈迦像のまえに大悲呪を誦して行事をおわるのである。

坐禅道場のまわりには霜柱が立ち、夜明けまえのしじまの中を、ひたすら坐禅に打ちこむのである。しかし、坐禅をはじめてみて素人的感想は、静寂につつまれた環境のなかにありながら、いままで経験したことのないような騒音と不安が心の中をよこぎることである。日数を追うごとに落つきはもどるが、相変らず心の中の騒音と動揺が止まず、明鏡止水の心地を保つことができなかった。しかし、日常生活の体験では味うことのできない、びしっとしたものが頭の先から体内を貫くような感にうたれたことは事実である。帰山してお念仏を相続したのである。声を出すことによって一層騒音がかもし出されるように考えられがちであるが、実は逆で、心の中にはいいしれぬ静寂を保つことができた。

毎日の追われるような生活の中で、真になすべきことを忘却してしまいそうな、現代のはげしい社会のうごきである。まごまごしていれば押しつぶされてしまうかもしれない。そんなとき、称名念仏の利益はまわりの狂騒的なテンポに流されて埋没されてしまいそうな自己自身を、しっかりと目覚めさせてくれることである。

現代もっとも必要なのは、自己を見失わずに静かに自己をみつめる眼をやしなうことはなからうか。

断絶を超えた世界

—おさとりの日におもう—

△—▽

釈尊のおしえは体験を通して説かれている。「三界みな苦なり。われまさにこれを安んずべし」と語られているが、釈尊自身、その経験の芽ばえが、すでに幼児のころにあられた。そして、この人生における苦を、何とかして救いたいというねがいを、釈尊は最初からもっておられたにちがいない。そこに、釈尊がこの世に出られた、大きな意義がある。やがて、その苦の根源をみきわめて、その源をあきらかにされたのが「さとり」ということである。この苦しみの源をつきつめていくと、根本的には、執着ということに起因するといわれる。いろいろなことにこだわるということ、いわば自らに執われて、自分自身が身動きがつかなくなっていく。い



高松 誠 戒

(長野市在住)

わゆる自縄自縛(じじょうじばく)の状態におかれてしまう。まったくの自由を失われてしまうのである。自業自得といわれるように、その結果、苦しみをみずから受けることになる。その苦しみの源を明らかにすることによってのみ、自由の世界に生まれることができるというのが、釈尊の見出された真理の根幹である。したがって、執着を去るということが、まことの「さとり」ということができる。

「寂滅を樂しみとなす」という言葉にあらわされているように、執着や煩悩の火がすっかり消えてしまうということが、結局、本当の解放であり、完全な自由であり、そこにこそ、真の平和がおとずれるということができよう。

しかしながら、執着を去るとか、煩悩が寂滅するとかいっても、わたしたち自身の意識的な努力によって、果して

できるものなのだろうか。なかなかむずかしいことといわねばならない。

執着を去るといっても、そこに執着でないものと、執着しているものとがあつて、執着の部分だけを切りとることができるものならば、外科的な手術のように、案外簡単かもしれない。しかしその執着をとり去ってしまうと同時に自分もどこかへ行ってしまひそうになる。なぜなら、切りとろうとする努力そのものが、実は一つの執着であり、結局、執着が執着を、自分が自分を切りとることになつてしまふからである。そう考えると、決して簡単に実行できることではない。むしろ、執着以外に、自分は存在しないということが、だんだんはつきりしてくる。修行をつめばつむほど、ますますその困難さを痛感せざるをえなくなるのが、人間の現実であらう。

△二▽

釈尊は、たしかに人生の現象の奥に眞実を明らかにされたのであるけれども、実際の人生の苦から解放されるために、釈尊と同じようなことができるであらうか。いいかえると、釈尊と同じような「さとり」が、だれにでも起るかということになると、はなはだむずかしい問題である。理念としてそれが理解されたとしても、実際、人間は動物として、生命を

もち、生存したわけであるが、その「生きている」ということと自体が、本来人間の知識のみをもつてとらえることができないものである。なぜなら、とらえたものは、すでに「生きている」ということではないのだから。

ところが、釈尊は、このもっともむずかしい人生の「生きた」現実のなかにありつつ、そのいろいろなきずなや限界の中から独立して、眞実の自由を獲得されたのである。さらに、その完全な独立と自由解脱を人びとにおしえ伝えたいという願ひをもたれたのである。

その釈尊の願ひは、見出された眞理は、歴史をこえ、国境を越えて、いわば時間、空間を超えて一つの大きなはたらきをなしつつ、現代にいたっていることができる。そのもっとも単的な言葉としてあらわされているものが「無量寿」「無量光」である。時間、空間を越した眞理—無量寿、無量光が「願ひ」として、わたしたちにはたらきかけ、救う光となるということが、釈尊の説かれた、仏教の究竟のおしえである。

さらに思いをいたすと、釈尊のさとりを聞かしめたもの、成道をなさしめたものが、そこにあったにちがいないということもできる。釈尊のさとりの根源ともいふべきものが、わたしたちのところまで到達しており、それがまた、わたした

ちを生かすとともに、わたしたちの、さとりの光りとなっているにちがいないということである。

その点からしても、積尊のさとりの意義を、わたしたちはもう一度かみしめてみる必要があると同時に、また個人個人の意義ということをも、もう一度考え直してみなければならぬと思う。世の中に、多くの人がいるのだから、自分ひとりくらい、いようがいまいが大した問題ではなからう、というふうに考えると、自分は生きている必要がないから生きていなくてもよい、ということになる。

そのような考えに執られると、現実生きる人間としての「生甲斐」とか、自分自身の「人生の意義」とかを見出せるはずがない。

△三▽

自分ひとりくらい、というけれども、ほんとうは、その自分ひとりが、すくなくとも、この「自分」にとってはかけがえのない大切なものである。この意味からして、個人個人の中に真理が蔵されているということが、今日もう一度あきらかにされなければならない。

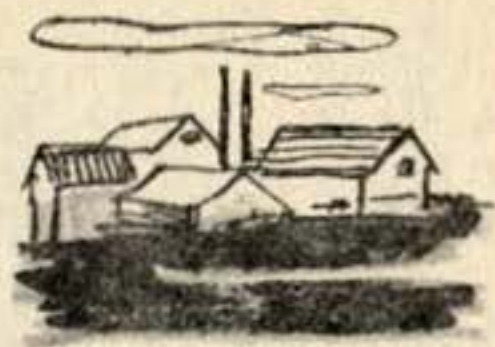
華嚴のおしえの「理事無礙」といわれるような大きな理法が、ひとりひとりのところに、具体的なものの中に、現われ

ているということが明らかにされ、そこからさらに、ひとりひとり個人と個人とが一つの絶対的な境界、法の世界において、おたがいにうなずきあうことのできる世界、断絶を超えた世界、すなわち「事々無礙」の世界が展開してこなければならぬ。

まことに、積尊をして、さとりを開かしめた大きな生命、大きな知恵、それをさかのぼってゆくと、形や、また働きがそこに展開してくるわけであるが、その根源的な無量寿、無量光すなわち「阿弥陀」につねにたち帰ること、つまり、阿弥陀に帰することによって、いわゆる「仏々相念」の法界が展開してくるのである。そこにこそ、浄土が展開するということをおもうのである。

それは、時間、空間を越えてさらに時間、空間の中に含まれているという意味は、わたしたちが、つねに生かされ、わたしたちの行く手には、歩むべき道を、はっきりと光りをもつて示していただいているということである。

「なむあみだぶつ」という、きわめて簡単な、六字の名号を称えることによって、直ちに、生甲斐を見出すことができるといふところまで、展開されてきたのが、浄土のおしえであり、積尊のさとりの意義が、そこに人類の宗教として価値がみいだされるのである。



一枚起請文と浄土信仰(上)

—大正大学女子実践仏教講話より—

香 月 乗 光

(仏教大学教授)

学問というものは、何年続けてもしつくせるものではありません。私も長年にわたって、浄土宗学の研究にたずさわっておりますが、まだまだ研究すべきことが数多く残っております。学問の道というものは、尽きるものではないということです。最近つくづく感ずるようになりました。それと共に余命が短かくなったことを思いますと、この生命の問題を解決することは、学問の道ではできないのではないと痛感せざるをえないのであります。このことと今お話しする一枚起請文とは、密接な関係をもっているということを最初に申しあげておきます。そしてわずかの時間に、法然上人のお念仏の教えの精髓をきわめたこの一枚起請文についてお話しすることは、大変むづかしいことですが、私の力のおよぶ範囲でお話し申しあげたいと思います。

法然上人には非常に多くの著作と法語とが残っております。それらと法語の中から三十一の文章を抜萃して、一ヶ月の間毎日拝読できるように配分し、編集された「元祖大師御法語」と題する書物がありますが、この一枚起請文は第二十三番目、つまり二十三日に拝読するように配分されております。それは法然上人が一二二二年(建暦二年)正月二十五日、今の知恩院の勢至堂のところで八十才をもっておなくなりになる二日前、すなわち二十三日に書き残されたものであるからです。

その時から今日まで、凡そ七百六十年の長い間、数多い御法語の中において特にこの一枚起請文が浄土宗の宗侶や信徒の間に読まれ、親しまれてきたのです。いや、ただ浄土宗の僧俗の間ばかりではなく、他宗の人々の間でも尊ばれている

のです。その二、三の例をあげてみましょう。

まず京都嵯峨天竜寺の禅僧桂州和尚は、わずかに一枚の紙ではあるが、その中に大蔵經のすべてが収め尽されていると讃えております。つまり仏教のエキスがこの一枚起請文の中にしぼりとられているということでしょう。釈尊がお説きになった教えはまことに厩大なものですが、それがこの一枚の紙の中に収められているというのです。

次にやはり禅宗の紫野大徳寺の有名な一休禅師は「一枚起請もつとも奇なり」といって、短かいものではあるが世にもめずらしい勝れた教えが説かれていると歎じ、更に法然上人を尊んで「活如来」とお呼びになっております。

また、これら出家の方だけではなく、一般の人、例えば明治文学の代表者幸田露伴はこの一枚起請文を読んで、「言近くして意遠く、語樸にして義明らかであって、上人の大慈大悲の精神、至深至厚の恩徳が充滿し、実に日本文で書かれた神品である」と称讃し、宗教を説き明かした秀れた文学であるということ述べております。

更にまた、詩人高村光太郎は奥州花巻の松庵寺という浄土宗の寺にお参りして、この一枚起請文を聞き、「智恵子抄」の中で「仏を信じて身を投げ出した昔の人のおそろしい告白の真実が、今の世でも生きてわたくしをうちました」と、その

感激をよんでおられます。

このように遠い昔の人でも今私たちに身近かな人も、この一枚起請文で大きな感銘を覚えているのです。なぜこの短かい文章が今の人の心まで打つのか、このことを考えねばなりません。

ところでこの一枚起請文は前に述べましたように、建暦二年正月二十三日、法然上人がおなくなりになる二日前にお書きになったものです。この二十三日にお弟子の勢観房源智上人の願いによって書かれたものです。この源智上人は平重盛の孫に当ります。平家の滅亡は法然上人が浄土宗を開かれてから十一年後のことです。平家が滅びた後、源智上人の母が人目をはばかって、かくし育てておられたのを法然上人の弟子にされたのです。この年は建久六年で、法然上人六十三才、源智上人十三才の時でありました。

こうして源智上人は建久六年から建暦二年まで十八年間、法然上人のもとで浄土の教えを受けたのです。源智上人は非常に慎しみ深い人で、あまり人と交わることを好まれず、一人静かにお念仏を称えていられた方のようにです。そしていつも法然上人のおそばにつき随ってお給仕をされておりました。法然上人はこのような源智上人をことの外いつくしまれておられたようです。

その源智上人が、すでに病い重いお師匠さまはいつおなくなりになるかわからない、いつお浄土にお帰りになるかわからない、お帰りになってしまえば、もう再びご懇篤なお念仏の教えを授かることができなくなると思われ、法然上人の枕辺にお座りになってどうか形見としてお念仏の教えについて肝要なことを書き記して、私に賜わりとうございますと、お願いされたのです。法然上人は快く承知されて、この一枚起請文をしたためられたのです。重い病気にもかかわらずこの御文をお書きになったというところに、いかに法然上人が源智上人をいつくしまれていたかということ、またいかに法然上人がのちの世に、自分が亡くなったあとの人々のために、浄土の教えを説き残そうという熱意にもえておられたかがわかると思います。

実はこれとほとんど同じ文章を浄土宗第二祖となられたお弟子の鎮西上人にも授けておられます。鎮西上人は更にその弟子入阿にお授けになっておりますが、その文章の後に、「聖の御房（法然上人）のたしかに教えおかれたことは、百度も千度もこのようでありました」と、書きとどめておられます。ということは、法然上人はこの一枚起請文に書かれてあることを、人々に常にお話しになっておられたということですから明日知れぬ重い病いの中で、最後の生命をふ

りしぼって、自分の説いてきたお念仏の精髓が、日頃お説きになったことばと共に、ここに力強く示されることになったのです。

法然上人には数多くのご伝記が残されておりますが、中にも知恩院に伝わっております「法然上人行状絵図」四十八巻の伝記があります。このご伝記は法然上人の伝記を書いたものとして貴重なものであるだけではなくて、この当時の風俗を知るうえで、こよなき歴史的な資料でもあります。このご伝記の中に、法然上人は建暦二年正月二日頃から数年来見えなかつた目が見えるようになり、聞えなかつた耳が聞えるようになったと書かれてあります。したがって源智上人の請にこたえられることができたわけであります。だからこそ法然上人はまさしく多年の体験が、最後の生命のかがやきとともに湧き出る中に、この御文をお書きになったものということができるのです。

こうして重い病いの中で一枚起請文はできたのですが、私たちはほとんど毎日欠かすことなく、この御文を拝読いたします。ところが幾遍拝読しても新しい思いで読むことができなのです。これが一枚起請文のもっている一番大事なところでありましょうが、この新しい思いは一体どこからでくるのでしょうか。ここに宗教的な信仰が今なお生き続けている

力というものをみななければならぬと思います。

四十三才の時に浄土宗をお開らきになり、八十才でおなくなりになるまで、常に自らお念仏を唱え、人々にも念仏をすすめてこられたところの力強い信仰が、この一枚起請文の中に今なお流れているのです。そしてそのような信仰は、法然上人の深い宗教体験から生れてきているのです。最後の生命をふりしぼって書かれた一枚起請文の中に法然上人の信仰が体験が、そしていのちが今なお伝わっているといえましょ

女子実践仏教に参加して



小 菅 和 子

(文学部史学科四年)

京都の残暑は非常に厳しい暑さである。九月三日から二泊三日で京都知恩院に於いて女子実践仏教が行われた。参加者は二十一名宗門子弟の人・一般在家の人半々程である。大学から法式指導として八百谷先生、総監督として安居先生が御

う。

だから私たちが本当に心を一つにして拝読しますならば、その中に流れているところの法然上人の信仰と体験に接し、その働きかけをうけることができると思うのです。そしてその信仰と体験とによって築きあげられたところの高い精神の世界、高い宗教の世界が、私たちを包んでくるのです。

そこに今なお私たちの心を打つ大きな理由があると考えます。

同行下さった。

全員宗門からいただいた輪袈裟を着し、手には珠数をかけ開山式に臨んだ。鶏飼執事長のお言葉を得、道場訓を守り修業に勤めることを法然上人画像の置かれている雪光殿で誓い、早速「南無阿弥陀仏」の十念を唱えながら大殿参拝を行った。休む間もなく八百谷先生の法式指導が行われた。経本を開くのが初めての人も何人かいるし、経文を唱えることに疑問を感じている人もいる中で日常勤行式の練習、一度、二度、初めの内は蚊の鳴くような声も終りには大殿の中一ぱいに響く程までになった。日常勤行式の他に三尊礼を行った。女子ばかりとあって、三尊礼のように音楽的なものは覚えもはやく、初めて行ったとは思えない位であった。

二日目に仏教大学の香月先生のご講義を受けた。「一枚起請文と浄土信仰」についてである。法然上人の御遺訓である一枚起請文、その中における信仰心「南無阿弥陀仏」を唱える一向念仏、時代の隔たりはあっても念仏信仰を行なう人々の心情は変わっていない。現代社会の中にもこの念仏心は通用するのである。という先生のご講義は我々現代社会に生活している者の心に深く刻みつけられ、各々が心に感ずることが多かったと思う。私自身寺に生活していながら「念仏」という言葉を甘くみてしまい、声に出して念仏はするが何のためにお念仏しているか疑問を持ちながら、そのまま終ってしまったっていた事が多かった。「南無阿弥陀仏」と唱えることによって、自分の心が法然上人に一步近づいた気持ちが非常に強く起ったのである。

この日午後からマイクロバスにて比叡山中にある黒谷青竜寺に向った。途中百万遍知恩寺・智積院を参拝し、夕方青竜寺に到着。知恩院からくらべると嘘のように涼しく、法然上人がこの地で浄土宗開宗を思われた所でもあるし、又本堂の阿弥陀様に向い、経文を唱えていると、我々でさえ外界の事を忘れ修業道の厳しさを味わう気持ちが湧き出る場所でもある。ここでは夜に反省会を開いた。知恩院の諸先生方を前に皆それぞれ意見を交し、念仏はなぜ必要なのかなどの質問も

出て、諸先生方の御意見も交え多いにディスカッションした。三日目は早朝から比叡山根本中堂等を参拝し、知恩院へ戻り各堂参拝の後閉山式を行った。記念に二連の数珠をいただき、浄土宗の一宗門人として、この実践仏教中に学び得たことを基にして勉学に励むことを誓い二泊三日の実践仏教を終えたのである。

暑い中、休み中とはいえ二十一名の人が集まったこの実践仏教は、参加した一人一人の胸中に何かを植えつけたことであろう。ただ暑さの中で自分を甘やかしておくことも結構だが、たとえ三日間ではあっても、暑さを忘れて、厳しいスケジュールの中に没頭する。それだけで自分の心に新たな意欲が湧いてくるのである。比叡山に向う途中京大の前を通った際、一部の学生が内ゲバを行っているのを見た。皆車の中でそれぞれ思う事を口にしていたが、『なんてつまらない事を行っているのだろう』という気持ちの人が多かった。内ゲバを行っている人はそれに没頭して世間に何かを訴えている。我々はお念仏を口にすることによって、すべてを忘れそこから又新しい行動を行うのである。そんな境地を得たのである。暑い中我々のわがままを聞き入れて下さった八百谷先生、安居先生、知恩院の方々、大学院の広川さんに厚く感謝いたします。



沢 朱 実

(文学部三年)

今年こそ浄土宗女子実践仏教を実施しようではないかというお話が、安居香山先生からあり、私たちは案内書発送をお手伝いしました。九月三日から、二泊三日で、知恩院と法然上人が修行された黒谷で行われ、予想外なことには、一般在家の女子学生が多数参加したことです。

半信半疑の人、何でも経験することは良いことだから等、さまざまな理由で参加したのです。理由のいかんによらず、在家の人が多く参加したということは非常に心強く感じました。

ただ悲しいことに、もう少し寺院の女子子弟がいても良かったのではないかと思います。夏休み前に、女子実践仏教の参加を誘ったところ、寺院関係の女性は、口をそろえて、「お経を読むんでしょそれなら行きたくないわ。」と言って、そっけなく断わられてしまったのです。

果して、これで良いのでしょうか？

私たちは、お寺で生まれ、仏教を戴いて育って来たのです。そしてわざわざ、仏教専門大学である大正大学へ入ったのですから、女子実践仏教くらいは参加してみようという気持があっても良いと思います。

先生の講義を開き、阿弥陀様の前で、別時念仏をすることによって、各々どんな小さなことでも何かを感じ取れるのではないのでしょうか。将来お寺にお嫁に行かれる方もいらっしゃると思います。その時、何かきつと役にたつこともあると思います。

黒谷に泊まる晩に、知恩院の諸先生方、大正大学の八百谷先生、安居先生を囲んで、反省会や質問を兼ねて、女性と仏教についての座談会を行いました。輪袈裟の由来、お珠数の意味など身近なこと、説明して下さり、私たち仏教について初歩のものも大変親しみやすく、理解することができました。

また、在家の一年生から活発な意見、質問が沢山でて、諸先生方も、たじたじになられたほどです。

来年も是非女子実践仏教を実施して頂きたいと思います。そして、寺院の女子学生はもちろん在家の女子学生も多数参加すること願っている次第です。

十二因縁

—その12—



生死をはなる(老死)

澁谷賢応

(長野県茅野市心光寺住職)

無明にはじまった十二因縁もこの老死を帰結としています。この老死の頃は、無明よりの帰結であると同時に、また前項生の帰結でもあるわけです。

老死は、詳しくは老死憂悲苦悩となっておりまして、人生のすべての苦しみを総称するわけでした、お釈迦さまが王位を捨てて出家し、おさとりを開かれたと言うことも、一にかかってこの苦悩よりの離脱、生死を出離することになったことは申すまでもありません。したがってこの十

二因縁も、お釈迦さまがこのことに思惟をいたされるに至った因をさぐれば、この老死とそれにつらなる苦悩よりの離脱であったわけでございます。それ故にこの老死に中心を置いて無明に逆上る逆観と、無明より順を追うて老死に至る順観とが考えられているわけですが、その観法の発足点とする所は、むしろ順観に非ずして老死を中心とする逆観にあったわけでございます。それ程現実的であり、切実な願が仏教の根本であるわけでございます。

先にも申すように、仏教とは離苦得楽の教です。拔苦与楽の教です。とすれば、この十二因縁もこの生死を離脱することによってその意義があり、お釈迦さまのご苦勞の程をいか程でもうかがい得て、ご報恩の誠がささげられるものでありまして、ただ十二因縁とはいかなるものであるかと言う解説を学問として学ぶだけでは何の意味もないものと思うのです。

さて老死は総じて無明よりの帰結であると同時に生に対しての帰結であることは前述いたしました。「生あるものは必ず死す」と言うように、生れたものは例外なくその日より生死の苦悩に浮んだのでありまして、生きとし生ける者のまぬがるべからざる運命とでも申しましょうか。この因果は誰しもが納得し得る生物的な因果であり、簡にして

甚だ明です。

しかしながら、これよりの離脱を期して教の如く十二因縁を逆観しましても、人間の根本無明に突き当って離脱の道は明示せられませんか。ここに法然上人のご苦心があり、本願念仏を選び択られたけわしい道程があったと思うのです。

老死は人間のまぬがれ難い運命、その究極の無明もまた人間本性に基づく確執の因とすれば、これを即断するの道は人智を絶する本願の願力による外ないわけであります。

このことは法然上人が善導大師のみ教により、確証し宣言せられ、そのご生涯を通じてくりかえしくりかえしお説きになっておられる所であるにもかかわらず、まだ私たちの小賢しい煩惱はなかなかそのままだにこれを受納することができないのです。上人が生死解脱の最短の道を明示せられ、大方便を以て浄土の道を教えられておるにもかかわらず、それに肯ぜずして遠い迷路をあえてさまよわなければならぬとは。

○

百喻經に債、半錢の喩と申すお話がございます。

昔、ある商人がありました。他人に半錢を借しましたがなかなか返してはくれませんでした。どうしてもそれを取

りたいと思ひまして借金取りに出かけようと思いました。友達はそのが無駄であることをいさめて言いました。『君が借した半錢はくれたものと思ひなさい。そのうちにきつと返ってくるからそれを待ちなさい。そしてそれを忘れて氣を楽にもちなさい。』

しかしながら、この友達の言葉も通じませんでした。そしてどうしても取ってくると言い張りました。

半錢を貸した人は大河の向に住んでいました。そこへ行くには当然この大河を渡らなければなりません。その河には渡し舟がありました。一度渡るに二錢を費さなければなりません。その人はそれがありませんでした。たので、舟守りに借りなければなりません。ようやく尋ねあてた彼の家に、彼はいなかったのです。その商人はさがし歩いたあげく、空しく帰らなければなりません。帰りににはまた舟守りに頼んで二錢を借りなければならなかったのです。商人は半錢のために四錢の借りをしてしまい、まだ目的は達せられませんでした。

この愚かしい物語りは明示せられた大道があるにもかかわらず、あえてさまよう私たちの愚かさにも通じます。

○

上人の御消息の巻に念仏をすすめる次のような名文がご

ざいます。(安心正決)

しかるに衆生の生死をはなるるみち、仏のをしへさまざまにおほく候へども、このごろの人の生死をはなれ、三界をいづる道は、ただ極樂に往生し候ばかりなり。このむね聖教の大いなることなり。次に極樂に往生するに、その行やうやうにおほく候へども、我等が往生せん事、念仏にあらずば、かなひがたく候なり。その中へは、念仏は仏の本願なるゆへに、願力にすがりて往生することはやすし。されば詮ずるところ、極樂にあらずば生死をはなるべからず。念仏にあらずば、極樂へむまらべからざるものなり。ふかくこの旨を信ぜさせ給いて、一すぢに極樂をねがひ、一すぢに念仏して、此の度必ず生死をはなれんとおぼしめすべきなり。

一大聖教の発点である十二因縁も、この生死をはなれる道にvariなく、生死をはなれ、三界をいづるの道は、このごろの人には極樂往生以外にない。極樂往生の道にはまたいろいろあるけれども、私たちが往生する道は念仏以外にはないのだよ。所詮、極樂を願わなければ生死を離れると言うことはあり得ず、念仏によらなければ極樂に生れることはできないのだよ。このことを深く信ぜられて、一すぢに極樂をねがい、一すぢに念仏を申して、このたび必

ず生死を離れんとなさることですよ。

まことに明快なご法語でございまして、一度、二度、度を重ねて拝読することに切々胸にせまるものがございします。念仏は仏の本願なるゆえに、願力にすがりて往生することはたやすいと申されているわけです。まことに疑うべきもないさとりへの最短距離と言うべきでしょう。

ここにおいてまた本願とは何かというようなさかしらの考えが頭をよぎります。このことが四錢を失う商人の愚かさにも似ていることを知りつつも。

無明の項において申しましたように、本願とは根本無明を断じ去ったその願力にあると思うのです。無明と本願とはその起点を一にしていしかも無明な本願力に克服し尽されている。それなるが故に常に私たち凡夫の念仏に呼応して迷界より悟界へ、地獄より極樂へ導入せられてゆくのである。本願とは迷界を悟界に超克せられた、信に基ずく絶対的な大前提であり、最終決定であると思うのです。そう思うとき、十二因縁もまた迷界より離脱して悟界の相を以て味うことができると思うのです。

(終)

二十五各靈場を通じて強く感得されることは、上人の正法（念仏）護持が誰からも共感随喜されていたことである。又靈場が各宗寺院にわたり尊崇され、あたかも上人いますように仰がれ現在に至っていることであつた。上人御臨終の様子を感じられそめた正月三日、側近の信空が「古来の先徳みなその遺跡あり、しかるにいま精舎一字も建立なし、御入滅の後、いづくをもてか御遺跡とすべきや」と伺うた。

上人答給うて

あとを一廟にしむれば遺法あまねからず。予が遺跡は諸州に遍満すべし。ゆへいかなとなれば、念仏の興行は愚老一期の勸化なり。されば、念仏を修せんところは貴賤を論ぜず、海人漁人がとまやまでも、みなこれ予が遺跡なるべしと勅修御伝は伝えている。

このみ教は、二十五靈場に生き生きとして光りかがやいてゐる。日本仏教は十三宗五十余派といわれるけれども、我が浄土宗のように、口称念仏することにより、誰でもいつでもどこでも、如来の来迎を仰ぎ、めで度素懷を遂げることができるみ教は他にその例がない尊いことである。口称念仏の声する所は、皆上人の遺跡である。寺院なり上人廟は、諸行無常の風に散じ易いし又火難の心配も少くない。口称念仏は諸

上人然法

二十五靈場をめぐりて

第五回



了博 上村

人と共にあり、人が住み念仏の声する所は皆これ遺跡である。なんと大らかな心状ではなからうか。

上人の教化力は誠に絶大である。その一例を靈場に見たい。十番靈場は大和国香久山法然寺である。同寺御詠歌は、「香久山の、麓の寺はせまけれど、たかきみ法を説きてひろめん」とある。香久山麓の住人達は、大仏殿再建に当り、上人が身命をかけて尽力し、いつも念仏はこれ阿弥陀如来の御本願と示されるみ教を有難くうけとっていられた。奈良に見

えられた時の帰途、上人を招待して摂化を仰ぎ自然に靈場ができたのである。同地方は昔からよく拓けて排水もよく所々に溜池あり、耕地の区劃整理もできていて、文化の香り高く住人の思想も又知的水準がたかい。私は同寺に詣でて寺の境内地の三方が用水堀となつて田畑をうるほしている現状を見て、成程上人を招じて、上人の高いみ教を有難く拝されたことが判つたのである。しかも人人の法悦は、上人の尊い靈場として護持し、つねに相よつては念仏を唱え、そのみ教を相伝して今日に至らしめた、上人の生きた人格を感得した。

その次の例は十五番靈場伏見源空寺である。同寺御詠歌は「一声も南無阿弥陀仏という人の蓮の上にのぼらぬは無し」という。口称念仏の功德をたたいて余すところがない。伏見は昔から大阪奈良への門戸になっている。大阪奈良地方に往復する時どうしても通らざるを得ない交通上の要地であつた。上人が摂州なり高野なり奈良なりへ教化の時には、必ずここに足を残された訳である。念仏上人が通行の時を待つて、教化をうけられたのであつた。道場が自然に寺として建立されたのである。同寺は瀬戸物町にある。せとものが生活になくはならぬ大切な諸道具である。元は大陸よりの製法輸入の品であつた。文化の香りたかい人々の住む所である。上人の教相判釈がよくのみこめた訳であり、その教旨が念仏

こそ如来さまの御本願とうけとられたからであつた。上人が態々摂化されたのでない、地域住人によって懇望され、教化の実が靈場として成立したのである。

——二——

六番靈場は、大阪四天王寺念仏堂である。御詠歌は「阿弥陀仏と 心は西にうつせみの もぬけはてたる声ぞ すずしき」という。いかにも簡単な中に蟬にたくした念仏の功德が示めされている。誰にも判り易く西方極樂世界へ往生の姿が感得できる。日本で大和の法隆寺とならぶ古い名利寺院である。同寺鳥居の外に「大日本仏法最初四天王寺」と石柱が立っているほどの由緒のある寺院である。ここで「もぬけはてたる」ということは、仲々味がありとりようによつては意味深い言ばである。同寺亀池の上部に六時礼讃堂がある。第二次大戦で戦火を免れた。六時礼讃堂修行と念仏の功德であつたからであらうか。文治元年春上人は四天王寺主務の慈円僧正に招待されたことに、上人と同寺との関係は発端する。慈円は慈鎮ともいい、法性寺先摂政忠通公の子息、青蓮院覚快法親王の附弟であり、山門（叡山）の棟梁であつた。建久七年十一月二十六日天台座主を辞めてから吉水に閑居されたので吉水僧正とも呼ばれた。上人との関係について、上人の六七日忌にあたり慈円の捧げられた諷誦文に、

上人存日のあいだ、しばしば法文を談じ、常に唱導にもちう。結縁のおもい、あさからず云云

というている。又建暦元年冬、上人七十九才、撰津箕面勝尾寺の西谷二階堂閑室から入洛帰入の時に當って、

大谷の禅房に居住せしめたまう

と、その住居についても格別の配意を加えている。

上人伝の白眉勅修御伝の中には、慈円僧正に関するもの十個所に見えることによって判るように、単なる友人関係というものではない、そこには深い尊敬心と知己として信仰上の有力な外護者であった。

慈円の附弟に長楽寺隆寛律師がいる。彼は栗田の関白五代の後胤小納言資隆の三男である。往生の志ふかく、上人を訪うて、その志願をのべられた。上人は大いに驚かれて、

当代聖道門の有職にて、大僧正御房（慈円）に、貴重せられ玉う御身の、これほどに思われ給けること、返す返すもありがたくこそ思たまふれ云云

というていられる。山門では、根本中堂の大切な法要安居の結願に、導師の選が行なわれた時、隆寛その器量たるよし、衆議をふると、衆目の見るところ最適と見られた碩徳であった。後に上人の門下には入り、念仏者として有名であった。かかる帰依は、その師匠である慈円僧正を通じての感化が少

くなかったからである。従って、我が上人と慈円僧正との関係は法の上では同信の立場にあり、時によってはその師匠であったのである。上人は慈円の乞を心よくうけ入れ喜んで撰津国東生郡天王寺村の四天王寺に赴むかれた。

— 三 —

上人が四天王寺にいられた時のことである。勅伝に上人、天王寺に、おわしける時、僧都善光寺参詣のことありけるが、たづね参らせられて云云

と伝えるものがある。僧都とは高野山蓮華三昧院に住し三論宗の奥旨をきわめた明遍であった。文意より見る時、はからずの訪問というようなものではない。上人をあちこちと所々を尋ねまわられて、四天王寺においてになると知って、特に来訪されたものである。時は建久六年、上人六十三才、明遍五十四才であった。この年上人四天王寺に關係して満十カ年、開宗二十周年に當る。

上人は先づ使僧を以って書院に案内せしめ、すぐ書院においてになつて、

先づこちらへ

といわれた。明遍はせかせかとして

この度、いかがして生死をはなれ候べきと、たずねたのである。

一般に往訪なり来訪の時には、いかに忙がしくとも、先づ挨拶があり、次に時候などの話があることが常識であろう。

所が開口一番本題には入った、よくよく思いつめていたればこそであろう。上人は、

南無阿弥陀仏と唱えて、往生をとくるには、しかじところそ存候へ

という。僧都は

誰もさわ見、をよびて侍り。ただし念仏の時、心が散乱し、妄念のおこり候をば、いかがし候べき

と、大切な問題点になった。上人は、

欲界の散地に、生をうくる者の、心あに散乱せざらんや。

煩惱具足の凡夫、いかでか妄念をとどむべき。その条は、

源空も力および候わず。心はちり乱れ、妄念はきおいおこ

るといへども、口に名号を唱えば、弥陀願力に乗じて、決

定往生すべし。

と、人の欠点をありのまま認め、す直に自然に念仏すること

を教示せられた。

これをうけたまはり候わんために、参り候なり

と、答えて安心決定するところがあつたのである。勅伝の舜

昌は、このことにつき「初対面の人、一言も世間の礼儀のことばなくして、退出せられぬことよ」と評したが、人人は、

そのす直さと一途な求道心を尊んだということである。

— 四 —

さて建久九年三月、上人は禅閣兼実公の要請に答えて選択本願念仏集を作られた。明遍は、その選択集をよんで

この書のおもむき、いささか偏執なるところあり

と思つて寝られたのである。その夜の夢に「四天王（天王）

寺西門に病人、かずを知らず多く伏せていた。一人の聖者あ

り、鉢に「かゆ」をいれて、さじで病人の口ごとに入れてい

るを見た。誰かときくと法然上人ですというをきいて、目さ

めている」明遍おもうに「われ選択集を偏執の文なりと思え

つるを、いましめられる夢なるべし。この上人は、機を知

り、時を知つた聖であることよ」と気付いたのであつた。勅

伝には

病人の様は、はじめには、果実るいを食するも、のちには

それも駄目となれば、わずかに「おもゆ」で喉を、うるお

すばかりで、命をたもつ。かくこの書に一向に念仏をすす

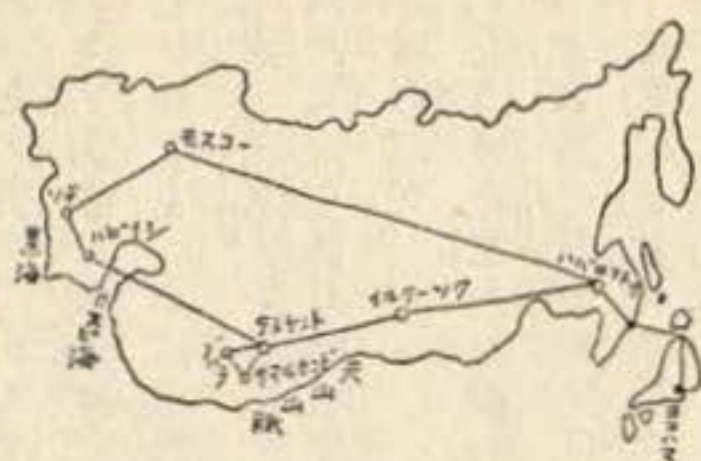
められたる。これにたがわず云云念仏三昧のおもゆにて、

生死をいづべきなり

としている。明遍は忽ち顯密教の諸行をさしおいて、専修念

仏門に入り、空阿弥陀と号している。貞応三年六月十六日念

仏裡正念往生、八十三才であつた。



シルクロードとコーカサスへ

の旅日記——七——

佐藤治子

四月三日、七時半ホテルを出発。トビリシの空港で朝食。

私達旅行団だけの専用機でいよいよソチへと向け九時二十分離陸。ぐんぐん上昇する飛行機の窓からは雪に覆われた高い山脈が見え初めた。コーカサス連峰の真上をしかも快晴の空を黒海沿岸のソチへと機首を向けて飛ぶ。一万五千米の高い山々、絶景である。右に左にとあかず日を受けた雪のコーカサス山脈。左側の山が次第に消えて行く。うっすらと海が見え出した。右窓には切り立った山々が手にとるように眺められる。間もなく下降し始めると、もう海面の上を空港へと僅か五十分で着いてしまった。一時間時計の針を戻す。暫く飛行機を降りても、今飛んで来た雪の山々のすばらしい景色にみ

とれる。美しい風景を写真にとりたい。けれど厳禁されている。特に港・空港は機械も見せぬようにと注意されている。

低い丘は柔らかい緑の草におおわれ、柳・桜・レンギョの色とりどりで、今までの所がうそのようにここは春うららである。ホテルまでの一時間以上のドライブは黒海に沿って崖の上を、或いは谷間を縫うように走る。伊豆半島をドライブしているようだ。黒海に面している丘のあちこちにすばらしい別荘風の建物が数限りなく、葉の茂った大きな柳やうっそうと茂る樹木を前庭に昔の姿のまま建っている。豪華さは今まで行った国々には見られなかったものだ。革命前の避寒避暑地としての特権階級の生活が想像できる。今は国民誰でも入

れる療養所になっているそうだ。「誰でも」といっても誰でも行ける所ではなさそうだ。

四日。この日は往復九時間かかるリワア湖へドライブする。途中で一休み。この美しい曲折の多い海岸沿いの道の長ドライブ、誰もが御手洗いにいく。婦人達が三人づつ順を待っている。思いがけない戸のない御不浄!! 私達はおどろいてしまった。このすごい別荘地の公衆トイレで……。習慣の差のあまりにも大きな違いにあきれるばかりであった。二百年前の地震の時できたという湖水は大して大きいものではない。けれど雪に覆われた切り立つ高い山々に囲まれた水面は静かにいかにも深そうな青さをたたえている。

変化の多い風景に富む日本は見きれない位風光明眉な土地が多い。けれど坦々と広がる大きな平地の多いソ連の人達は天下の絶景と知っているらしい。深山の美しい公園で散歩したり、黒海での海水浴に楽しめる人達はどの位あるだろうか。オレンジもここではふんだんに食べられる事と思っているたのに、オレンジは地元のソチでは一つも見ることでもできなかった。静養には最適の場所、けれどその自由はあるのだろうか。手ばなしにきれいだといえない現実の厳しさを感ずる。ホテルにある観光客誘致のパンフレットは英文である。

あの御不浄の事をふっと思い出す。観光々と宣伝する日本

にもこの矛盾が気のつかぬ所にあるのではないだろうか。ソ連を旅行した土地の中で、私には何にも残らない、只あのコーカサス山脈の雄大な自然の美だけが心に残ったソチであった。

五日。十二時半ソチ空港を離陸するまであの景色を再び眺めたいと思って飛行場に立ったけれど残念なことにすっかり曇っている。さて、飛行機の中へ何人かの女の人達が水仙をかかえて乗り込んで来た。農家の人らしい。おみやげにもらったのだろうか。やっぱり花を愛する心は世界共通だなと、ほほえましい思いで花をみていた。ところがとんでもない、花を売りに行くのだということを聞いてびっくりしてしまった。飛行機代が安いのだそうで花を売って足賃が出るということに、のんきに考えていた私はおどろくばかりであった。モスコへついてからも、ものすごい世界一というホテルのエレベーターの前でキウリを売っている女の人を見た。帰国途上の船であった青年から花を売りに行くんですよと話された時、なるほどあのキウリを籠一杯もっていた女の人の事を思い出し、私のほほえましく思った事は吹き飛んで消えてしまったのである。

「モスコ」

二時四十五分ヌブートボ飛行場着。すぐバスへ乗りこむ。

広い道路の両側は白樺並木。長い事曠野を走る。遠くに「ねぎ坊主」と呼ばれる寺院の大きな丸い屋根が見え出した。ホテルの名も知らされていない私達は大きなホテルの前へ止るバスから降り立って、初めてホテルロシアが我々の泊る所と知らされる。六千も部屋がある世界一のホテルだそうだ。部屋割が済む。私達の部屋を出た所にその階の世話係がいる。

珍らしく英語のできる人。メイドさんなんていえない。皆公務員なのである。チップなどは受けとらないし、出すとバカにしたと憤慨されるそうである。知人から電話がかかった。

東京の親類から私達が来ることを知ったけれど、飛行場は三つある広いモスコ、一つ違ふと遠くの別の飛行場へと走らなければならぬ。間合せてもどのホテルか分らぬ。日本人の旅行団の泊るホテルを探し、ようやくホテルロシアへ泊るらしいことが分り訪ねて下さったのである。丁度主人は名物の地下鉄見学に出た後であつた為、折角のサーカスの招待を辞退することになったのは残念であつた。

六日。八時半期食。クレムリン宮殿を囲む城壁のすぐ近く見える立派な食堂で久々に冷たい水を飲む人もあり、朝食のパンもおいしかった。いよいよクレムリン・レーニン廟などを見学に出発。

地面には氷が張りついている木立を通り衛兵の立っている

門を過ぎ、クレムリンの中の宝物館を見学した。歴代の皇帝の使用した王冠、王座、夫人達の裾を長く引いた豪華な衣装、外国使臣よりの贈物、戦利品等々、目をみはる物ばかり。時間が許せば一日見て歩いてもおきないだろうと思つた。印象的だったのは明治天皇から贈られた二枚折りのししゅうの屏風。金銀宝石のきらびやかな陳列品の中に光るしゅい陛下の贈物！ふちが濃いしゅい紅色にねずみ色で波を下に鶴がとんでいる模様は私達の目をうばった。「日本のは貧しうだね」と、若い人達はつぶやいている。日本のしゅい好みを理解できる人達でないと一寸しゃくにさわる。今でもあのしゅい光を放つ銀ねずみの糸のししゅうは私の頭に一番強く残っている。革命が起つて国内が波乱に荒れている時に、よく残されたものだ。革命前の貴族達の生活を知る歴史的な大切な品々である。

さて、レーニン廟へ向う。氷の張りついた木立に八列位の行列がつづいている。私達はバスでそこを通り、ある一カ所でバスを降りた。「写真機、ハンドバック等皆バスにおいて下さい」との注意を受け、降りたつた私達はユーラーさんの後について、この長い行列の廟に近いと思われた所へ割り込ませてもらった。勿論係りの人の指図あつてのことである。

誰も何もいわない。不平など漏らさない。「あー、日本の着



＜あちこちにみられる寺院の屋根＞

物着て来ればよ
かったと思わず
残念に思った。

というのはイン
ドのサリーを着
てコートを着て
いる婦人等をみ
た時、あれなら
国籍が分る、割
り込んでも旅行
者と分ってくれ
るだろうと思い
ついたからだっ
た。一歩々と

動いてはいるものの、氷ついた地面からシンシンと冷え込
む。正服・私服の係員が何かもっていないか、もし持ってい
るとそばの建物の中にある預り所へ置いて来なさいといわれ
るらしい。何人かバラバラかけて行く人を見て、御不浄らし
いとかけて行った人が「荷物の預り所ですよ」と話してくれ
たのである。ふと見ると御丁寧に帽子までぬいて来てしまっ
た主人の顔は蒼気だっている。ウールのマフラーを頭からか

ぶり、絹のマフラーで衿元をあたためていた私は、そのマフ
ラーを引きぬきこれで頭を覆ったらと急いで渡した。スウー
スウィーと衿元が冷えてくる。婦人用の絹のマフラーを頭から
巻きつけた異様な主人の格好を見て周囲の人達は笑ったりか
らかったりした。そうでもしてこの延々長蛇の動くか動いて
いないかの行列に加わっている辛さを打ち消そうとつとめた
のである。

赤の広場に黒大理石らしい四角の建物が見え出した。皆し
ゆくしゆくと入って行く。「二列に」「口をきいてはいけな
い」といわれる。衛兵が直立して立っている。段を静かに降り
中に入ると八人程衛兵がこわい顔をして警備している。ガラ
ス張りの中に青白い象牙の様な顔をしたレーニンが横たわっ
ている。歩き乍ら合掌をした。息のつまるような遺体安置室
より寒い外へ出た時ほっとした。レンガの塀の下に安置され
ている共産党の各歴代の偉い人達。戦死者を葬ってある石碑
の列は深い雪にうづまっていた。片山潜のお墓もあった。ホ
テルへ戻り昼食。私達は案内の人に断って別行動をとり、知
人に案内され午後尼僧院へ行った。有名人のお墓々々。写真
をはめこんだもの、故人の肖像を彫ってあるお墓等々。雪ど
けの水で靴をぬらしてお墓を参詣。花をもってお参りに来る
人より、各お墓を見て歩いている人の多いのに驚く。それほ

どこここには有名人が沢山葬られているのだ。

そしてモスコー大学へとタクシーを走らせる。スターリンの好みであったという建物。ゆっくり見学すると三日かかるという。写真にとりようのない大きく立派な建物。日本のゲバ棒学生に見せたいようだ。しーんとしている。あんな激しいデモをしたら皆シベリアへ送くられてしまうのではないだろうか。



＜モスコーの赤の広場の前にある昔の処刑場＞

ナポレオンがここまで来て燃えるモスコーを見て引き返えしたという、モスコー河を見下す所へ立った。河は未だ氷結している。団体の今夜行く所はバレエか、何を見るのか全然誰も分らぬ。バレエであつたら惜しい

など思いながら、私達は夜レストランアルバートへ案内された。入場料一ルーブルを払うらしい。メインステージに近いテーブルが予約されていた。次々とステージへ現われる歌手・バレリーナ・手品・軽業師などによる素晴らしいショウ、一流の芸術家ばかりという。お客達もタキシードは着ていないとしても、婦人達の衣装はソ連にもこういう社会もあるのだという認識を深めさせてくれるに十分であった。翌朝、私達はどこへ行ったかと聞かれた。「私達はバレエでもなく、劇場は立派だったけれど言葉はわからぬし、つまらなかつた。佐藤さんはよかったわね」と羨しがられた。

七日朝、美術館を見学。途中モウモウと湯気の立っているプールを見た。誰でも泳げるという。摂氏一度の寒いモスコーの公衆プールはおどろきである。一時にセントラルレストランで昼食会。モスコーで一番古く高級なレストランとか。サービスもお料理もすばらしい。モスコーで別れるエリーナ・ユラー・エレナさんの三人に御苦労と労をねぎらう挨拶は年長者という口実で主人が挨拶に立ち、二週間世話をしてくれた礼を述べた。

出発までの一寸の間に私達は断頭台へ行ってみた。平たい大きな石が置かれている。まわりに鉄柵があり、それによりかかって一団の青年子女がギターを持ってたむろしている。

時代の推移とはいえ、ミニスカートをはいている女の子もいる。そのグループと断頭台をフィルムに収めてきた。

ソ連、特にモスコイで見た子供達のかわいい事！なるほど世界一だといわれるだけあってムクムクと着ぶくれ、頬はリンゴのような子供達は人形のように。ホテルへの道を歩いて行く時、なんと車が少いのだろうと気がついた。ワイシャツ一枚六千円位すると前に聞いたことがある。日本の終戦のあとのように買物に行列（この寒空に）しているのもみた。車などは凡そ考えもできない現状ではないだろうか。

短い滞在ではあったが私なりの感じ方をしたモスコイもいよいよ出発の時間がきた。午後六時バスへ乗る。今後は「日本の歌を」とサクラサクラから始めて、皆のうたえる民謡を歌う。市中を出るとただ坦々とした平原が続く。春が来たのだというけれど摂氏一度の寒さ。地面には雪が氷りついている。清潔な大都市。中央アジアからモスコイへと変化に富むこの旅行もいよいよ終り。九時間で大陸を横断するという飛行機の待つエアポートに近づいた時、螢の光をうたった。あゝる時はこわいようだった、けれど歌、踊りの上手なエリーナさん、日本語の上手なやさしいユーラさん、二人ともじっと聞いていた。ありがとうとふり向いたエリーナさんは涙ぐんでいた。白樺並木の向うの果しない大平原に夕日が沈む。

モスコイよ、エリーナさん、ユーラさん。サヨナラ。

北廻りから南へと逆コースをとったB班とハバロフスクで再会。タクシーが仲々ないというので駅へ行くまでの間、おろうそくやお線香を用意して金子さんを中心に数人で再び荷物をつんだままのバスを出してもらい日本人墓地へ行った。あんなに雪が深かったのに、もう一片の雪もない。泌々とお経をよむ主人のそばで金子さんは頭を下げ居られる。皆代る代るお線香を上げる。金子さんはビニールの袋に土を少しづめて持ち帰られた。日本の為に祖国へ帰れなかった人々の冥福を祈り、その家族の方々を想うと祖国を愛す心の片鱗もない今の激しい学生達に怒りが湧き起る。

車中で一泊し、シベリア平原を走り続けた汽車もナホトカに近いらしい。海が見えてきた。「ここまで来てみたものの、何度も乗船できないで恨み、悲しみで亡くなった人達の事を想うと、「やはりここは日本人にとっては心を暗くするね」という主人の言葉に、ただ大きくうなづくばかり。二人はナホトカから日本海へと広がる海を見て車窓に立ちつくしていた。

（終）

〈開放余談〉

山のおやじ



島津 登也

(群馬県沼田市宇楚井田在住)

大正十四年の春、家内を連れて樺太東海岸の知取町^{しとと}へお寺を建てに赴任、その十月三十日の夜のことである。

お寺さん、どうしても帰えんなさるか。そしたらもう一ツどうだね、外は随分寒くなって来たよ。(もっとドブクロを呑めという) いやもう充分、どんなに遅くなっても帰るか。らっていつて来たんだからな。

そうか、だともよ、これからだと、おやじが出るべにサ、そろそろ穴サ入えるんで餌探しに、やたらに歩くべもの、よっぽど気を付けねえとあぶねえよ。ことにもこの辺よく出る

んで熊の沢ちゅうけ、と津軽弁で説明する。

ようつつあん、あんまりおどかさなよ、といえは皆んながどつと笑った。すると隅っこの方でさつきからドブクロを盛んにあおっていた赤ら顔の爺さんが真顔で、イヤーおどかしでねえよ、内地のとちがって樺太北海道の熊はなア、ヒ熊ちゅうてな、ベコ(牛)サも馬サもかかるし、人間サもかかるって話、聞いたことあるベサ。

イヤ、そりや知ってるけどさ、今晚はどうしても帰えらなきゃ都合わるいんだ、どうしても泊るわけにやいかんだ……で今朝の馬檻^{まかり}は？

あれか、ありや知取の馬車屋でなア、もうとうに帰えらしたよ。お寺さん明日の朝早いから早く来いってな、あした早く来るだよ。

なーんだそうか、(じゃ歩きか、でも自分は足にや自信があるんだ、夜路の独り歩きなんて却って気がおけないでいいじゃないか) と思いながら、挨拶もそこそこに出かけようとしたら、その爺さん松明を一本出して、

おっさん、これ持っていきなさい、これが一番いい。二時間半ぐらい灯るから、大丈夫持つべえよ、よけえ明る過ぎると思つたら、この金を上サ^{うさ}上げてしほればいいんだ、と付いてある金のしほり方を教えてくれた。

それによろ、帰りは下り径が多いから、わりと楽だよ。その代り山火事には充分気を付けて下せえよ、と。

そうかこいつあ有難い、これがありゃ百人力だ！ モンペに地下足袋、足元も軽く甚だ快適である。表へ出たら松明をつけてくれた。パットあたりは十m四方も明るい、こりゃスバラシイ、これじゃ熊だって山猫だって、こわくはない。

気を付けて行きなさいよ。大勢が庭まで出て送る声を、後ろにしてスタート。

こりゃ大いによろしい。白樺や榛の木の密林、黄色い落葉で敷き詰めた小径、突然の明りに驚いた夜鳥の羽バタキ、小動物達がサット逃げる簾の音、こんなことでも時には、ヒヤットさせられる。ナーニ何が出ようとこわいことはない。と思えども、心の片隅で（山路越えて一人行けど……身はやすけし）クリスチャンの子供がいつか唄った「讚美歌じゃないが、南無阿弥陀仏と自然に出て来る。今自分はお寺さんに相応しい松明に照されて、念仏にすがって、白道を行く行者じゃないのか、何んの恐い事があるう。この道はこれ白道なんだ。熊も恐れるという、山猫だって、この松明にや驚くだろう。山猫などは国境近くへ行かなきゃいけないとか。この夏、豊原の博物館で、その剝製を見たつけが、こいつはスゴイ。此処は大泊から七十里（二八〇キロ）樺太の半分の地点

だ。山猫はマサカ出まい。

聖典にあったつけ、昔五武器王子という豪勇を以ってきこえた王子が、ベナレスへの径を急いで或日森へかかろうとすると人々が森には油毛ゆもうという夜叉が住んでいて誰も無事に越したものはないから止めなされと諫めたが、きき入れず森の中程まで来た頃、果して夜叉が現われた。ヤシの木ほど丈が高く、鏡のような眼、スルドイ牙と嘴、腹は紫色にふくれ上がり、手の平、足の踵は青黒く光り、全身は毛を以ておうわれている怪物で『何処へ行く、止まれ、私の餌食じゃ』と雷のような声で怒鳴った。王子は恐るるところなく応対して五ツの武器で闘ったが、武器は皆、油毛に張り附いて王子の身体まで張り附いた、でも王子は少しも恐れないので、夜叉は不思議に思い却って油毛が驚いた。王子は静かに説法してついに、夜叉は得脱したという話が、あったつけ。元来臆病な自分は、臆病風に誘われないよう、自分に言い聞かせるに実は真剣なんだ。

此の知取町というのは、数年前迄は、三十戸足らずの漁師部落だったとか。それが製紙会社ができるといので、商売あて込みの人達が、北海道は無論のこと、内地各地から我れ先きにと集って来て、今では一万五、六千の人口、それに季節労働者（パルプ用材伐採人夫）など併せれば、凡そ二万も

あろうかと。それに誘われて各宗派では、教線拡張を目ざして若い者を派遣、自分もその一人として、イヤがる家内を説得し、家内の親兄妹を説き伏せて、ようやく連れて来た妻が、今此の町の場合の借家に、浄土宗教会所の看板を守っているのだ。そして、必ず帰ると云って来たのだ。

今朝、知取川の上流十キロの開墾地の、沢田という八十二才になる爺さんが逝くなつたから、来てくれとの使いが来たのだ。河口の此の町から十キロも山奥だと聞いて、ウンザリしたが、ほんとうは、これこそが、私への使命じゃないのか、と思い直してOKで凍ついた路を、馬檻にゆられて来たわけだ。

コクのあるドブコクに神経を太くして、いい気になり、張子の虎のカラ元気ではあるが、熊なんするものぞ、山猫がなんだ。

今朝見たときは、スバラシイナナカマドやイタヤ紅葉の原生林も、夜ではサッパリ紅葉狩りもできない。今朝一緒に来た馬車屋の話では、この林は三キロも続いているとか。左の方は知取川が、溪流溪谷となり、大した大きい川というのではないが、河口の大工場の貯水場まで、多くのバルブ用材を流送するには、充分な水量、そして此の径は十m程の断崖の上に、川添いに作られたものとみえる。夏になると、もっ

と上流まで、無数といっていい鮭や鱒が登るのだ。それは一日中見ていても、見飽きない光景だ。ようやく三キロの長い密林を通り抜けたとみえて、天が大きく開け、満天の星の光りが、動画のように、ピカリピカリと、するどい槍でも投げつけるように、光りを地上を投げかける。(凍つく晴れた夜空の、星の光りというものは、そんな気がする。イヤ、極地に近い所でなければ、見られない特異なものであるかも知れない。未だかつて内地では、見たこともない光景である)。

今度は、右手は小高い丘続き、此処には二mもあろうかと思われる見事な笹の密生地帯、ほんとうにきれいな青一色、矢張り若者の今朝の話では、これはあの下り坂の上まで続いていて、二キロの余もあるんだとか。もう大分来た。時計は十時を少し廻ったところ、十一時半ごろは、ウチへ着けるだろう。充ず一服つけよう。煙草の煙りと臭い、それにこの松明の火などは、野生の動物の最も嫌うところだという。マアそんなに急ぐこともなからう。それにしても、朝の九時に部落へ着いて、もう夜の十時か、随分と手間取ったものよ、と歩きながら、今朝からの仕事を追って見る。枕経、湯灌、納棺、そして葬式、野田での俄か造りの火葬場(これが長かった。)それから骨揚げ、開蓮忌の御回向、法話四十分、で全くタバコ吸う間もなかった。昼飯さえも誰も食べないし、何分

にも狭苦しい家、自分も食べられなかった。だから一切終つてドブコクともなると、餓鬼道から朝立ちして来たかと思われる程、家中が、わいわいとなる。

ドブコクの酒盛りに、三平汁（酒粕の塩汁^{しお}へ鰯や大根、シヤガ薯などをどっさり切り込んで、グツ煮したもの）の肴。何んともイケルものである。飲む、食べる、吸う（タバコ）で、家の中は熱気でムセかえるよう。八十二の老人の葬式なのだから、葬式などという気分は全然ない。ややもすれば、ソーラン節が飛び出しそうな気配、トテモ、たまらないので、いうなれば口実を作つて、逃げだしたのだ。葬式じゃない、何かの祝いだ、祭りだ、バカな！とはいって見ても、これから逃げたのでは、開教にはならない。などと考へながら――、と其の時、後しろの丘の笹藪が、大ゆれにざわめいて、バタツと何物かが路上に飛び降りた気配。熊か？もう、頭の毛は総立ちとなり、総身の血が騒ぎ、両腋からは冷水の滝、念仏の声はのどに張り付いて出ない。

したのでようやく歩き出せた。と後しろのものも、バタバタと付いて来る様子、一瞬妙な気持になる。お念仏は出そうだ、できるだけ大声を、唸るように、怒るように、ぶっつけるように、挑戦するように、撃退するように、怒鳴りに怒鳴るお念仏。されど何んの変化もなく、バタバタとついて来る。でも後しろを振り向いて見る気にはなれない。もう少し行けば下り坂に、かかるんだ。坂を下れば大島牧場、知取の町だ。電灯の光りは天をこがす様にかがやいているのだ。そうなりヤコイツは飛んで逃げるだろう。

漸く坂の上まで来た。笹の丘が終ろうとするところ、そこは笹の平らな広場となっている。その時だ、広場の藪が急に大きくがさがさして、黒く大きく立ち上がったものが、これ又大きく鳴いた鳴いた、イヤ、嘶いたのだ。すると後しろのバタバタは、急に嘶いてモノすごい勢いで右側を駆け抜けて、笹原の中へ入り、二ツで嘶き合っている。ナーンダ、チキショウ！馬の親仔か。ウウ、オレは助った。助ったのだ。一度にこみ上げてくる安堵感というか、泣きたいような、大きな度胸がついたような。そして無心の大らかなお念仏が。

註 北海道や樺太の農家では、一般に牛馬は野放飼いをする。仔馬などは時に親から放れては遊び歩き、たまたま人が通るとその人について親の元へ帰る習性がある。可愛いものである。



ハガキでひとこと

冬を迎えて

上野山 瑞光

(和歌山県西牟婁郡在住)

さわやかな秋も去り、冬を迎える季節となり、第一印象づけられるのは仏名会である。

我宗では唯弥陀一仏に向って称名と礼拝することになっている。では、何故に称名と礼拝を繰返すのであるかというに、今まで作ってきた罪という赤字補てんのために努力しているかねばならないのです。

ところで人間は完全なものではない。動物から進化したものであるから、みな不完全な

ものです。聖人は、我々人間には先天的に不完全な点があるといっている。そこで日本では「つみ」「けがれ」といって、「滅罪生善」つまり身と心を清むることが必要であると、釈迦も祖師も中国の聖人の教えも、みな人間の精神は不完全なもので罪があるといっている。今日の階級社会を見、社会状況から考えてみると、結局は罪の軽重によってできているといえるのである。

では罪とはなにか。例えば、人の嫌がる、人の気に障る、他人の心を「チクチク」させたり「ヒヤヒヤ」させたりするような事も罪であって、知らず知らずの間に罪を積み重ねている。眼に見えるもの、耳に聴くもの、身に触るるものは、多くは皆我々を誘惑せんとしている。実に悪道に導く魔物である。

仏名会にあたり、念仏を称え礼拝をして滅罪生善の念仏にはげみ、懺悔生活の向上と現当二世の大安楽を求め、力強く生きゆきたいと念願するのである。

二人の師

吉田 勇之助

(東京都江東区毛利在住)

私は長いこと胃炎胃下垂で苦しめられました。よき医師に仲々めぐりあいませんでした。どうも悪いくせで、受診後処方箋をもつて薬局へいく途中、必ず処方箋の内容を見、薬の配合具合を読み、あんな診察でこんな薬を用いるのか等の気持が起き、少しもよくありません。よき医師にめぐりたい念が切でありました。

ところが戦前不図した縁で潰瘍の權威H博士にみていただいたのです。先生は非常なゲイテ崇拜者で、お住いもゲイテ精舎と名づけられた建物におられました。またお話しやいただくお便りには仏教者の趣が多分に口じみ

出るものがあり、一風変わった先生でした。慎重な診察態度、そして胃炎については経過をみながら何回となく処方を変え、症状に合うものを下さるという治療。胃下垂は病気でありません、あなたのは直りません……と申され、実に納得のいく説明振りでした。私が求めていた先生は「この方だ」という印象を受けたのです。

胃下垂のまま胃の調子も急によくなつてくるのを覚えたのです。先生との関係は、亡くなられたこの七月まで実に三十六、七年の間続いておりました。今やH先生とは幽冥世界を異にしてしまいました。しかし私のためにつくられた処方箋の薬はいつでもいただければ、それに何かとご注意をも承っておいたので心強くありがたいと思っております。

胃病患者の私は三十数年前に国手H先生にめぐり合い救われ、先生亡き今日でも先生のおかげを蒙っております。

また、煩惱のかたまりのような、そして絶

えず死の影におびえ続けている私は、ここに遂に「この師なるかな」と思う法然上人にめぐり合い、氣持にびったりくるようなお教えを得ることができたのでございます。心を定めて白く細くつづいていける道を一步踏み出したところです。

再びアミダさまの

印契について

水谷 大成

(愛知県豊田市在住)

かたかなのトの字に一の置処、上になつたり下になつたり。十月号のアミダさまの印契「左手の阿弥陀仏像」と原稿に書いたのに、編輯氏が「左手下」としてしまった。全日本浄土宗の寺院にまだ他に左手右手下の御本尊のまつられる寺が在す筈、どうぞお知らせ下さい。

尚アミダさまの印契もさまざま、当麻曼荼羅と清海曼荼羅の中台本尊は転法輪印で、智光曼荼羅の中台印相は未敷蓮華合掌です。当麻・清海は三垢消滅護念の印相、智光は開華三昧護念の印相でしょうか。識者のご教示を得たいものです。

白毫のないアミダ像と坐仏来迎のあること

阿弥陀仏像には三十二相円満具足かならず白毫があるべきなのに、十夜法要根本道場の京都の真如堂慈覺大師御作の靈像のみは白毫をお入れにならなかつた靈感縁起があり、世に白毫のないアミダ像もましますと記憶しています。

尚来迎仏は立像との通念ですが、当麻曼荼羅搜玄疏図本によりますと、新図はことごとく坐仏来迎で菩薩衆も坐像です。したがって大正大学の説法印の弥陀像は上品上中品来迎印であることもわかりました。古図はみな立佛来迎であります。

読者だより



岩井門主のステッキ

高橋良和

岩井智海門主は知恩院第八十世の門跡であり、浄土宗管長でもあった。

鈴泉とも号したが、布教の大家であったことは衆知のことである。

この岩井智海門主の先代は山下現有門主であって、いわゆる百三才の高令でなお一宗を総覧したことでも有名な近世の大徳であった。そのあとをついだ岩井智海門主はまた本山から晩年一步も外に出なかった山下現有門主と異なつて布教畑の出身だけに親教物請も多く全く寧日なき活動であつて、現職の門主でおそらく遠く満州にまで赴いたのはこの門主が最初であつたと思うのである。

文久三年五月十七日福岡市東唐人町の安河内市三郎の

二男に生れて、九才のとき同市成道寺の岩井境誉について得度しているので、現在の東唐人町の成道寺はなんといつても岩井智海門主幼年の頃の思い出のところであるといえる。

元来布教畑のこの門主であるが、若い頃は、バイオリンに興味をもち、バイオリンをさげた布教もやったようであるが、面白いのは明治末に出版された讃仏歌の本のなかに、作曲岩井智海の名を見出すのである。当時は讃美歌に対して讃仏歌といったもので、おそらく仏教界最初、初、の讃仏歌であり、もちろんその音符は、今日のようなお玉杓子ではないので、いわゆる1、2、3、4と書いた略符の時代ではあるが、立派に作曲しているのである。

から、その手腕というのが先見の明があつたことに感心するのである。

もちろん音楽、特に声楽も上手であつたので、後世あの美声に魅了された人々は随分多く、柔和なまなざしのこの門主の話は、声の美しさにほれぼれとしたものである。

大正十三年長崎大音寺に入山し、更に知恩院執事長、それから浄華院本山の法主、ついで増上寺本山に転住し、昭和九年三月二十二日に総本山知恩院に入山して一宗の管長と門跡を兼ねたのである。

さてその晋山後間もないころである。

この岩井門主は若い頃から、中外日報の真溪涙骨社主とは親交があり、この涙骨社主もかねて岩井智海師が門主になる日を心待ちしていたようであつた。というのは岩井智海門主も他年福岡で育つたことと涙骨社主もその頃博多万行寺の七里恒順和上のもとで修行したから、そのときからの知合いであつたのかもしれない。

若い僧風の男が、この中外日報社に真溪涙骨社主を訪ねたのである。

知恩院の常備局の小僧でございますが、門主からの使いでまいりました。

というので早速二階の社主の部屋に通つたのである。何が御用で。

社主の秘書がたずねると、

実は門主さまが涙骨先生にこれをもつてゆけと申されましてあずかつてまいりましたのでございます。

といって、新聞紙につつんだ長い棒と、それからまた新聞紙につつんだ小冊子ぐらいの大きさのうすべらいものをさしだしたのである。

秘書がそれをあづかると、使いの若僧はあたふたと立ち去つていったのであるが、さてそれから間もないころ、真溪涙骨社長がその新聞紙のつつみを開けてみると、一つの長い棒はステッキなのである。

おい、門主がわしがよほど年をとつていふと思われ、ステッキを届けてくださつた、あつはつはつは。

と笑いながらトントンとそのステッキをついて部屋中を歩いたのであるが、さてそのあと、

もう一つのつつみをあけてみよ。

というので、秘書が新聞紙のつつみをあけてみると、そのつつみのなかから、札たばが出てきたのである。

みると、その札たばは、十円紙幣で二十枚、折目正し

く揃って入っていたのである。

これは一体なんということか、どうしてこんな金が入れてあるのだろう。

読みかえしてみても二十枚、まぎれもなく二百円である。

へえ――

とおどろくより仕方がなかった。というのはその時代では百円札をみれば額にあてて拝がむほどねうちのあるものであるだけに、今日の金額では想像もつかないほどで、二、三十万円の価値は充分ある額である。

そこでそーっと札をもとの新聞紙につつんで、狐につままれたような感じでいるときに、その新聞紙の間から一通の手紙が出てきたのである。

その手紙の文面はこうであった。

真溪涙骨先生

わたしのような不徳のものが、一宗の与望をうけて知恩院の門主はなることは恥しいことである、檀信徒の方に申しわけなく思っています。

この足らざるわたしをどうか鞭撻していただきたく存じます。もし足らざるところがありましたら、このステッキでわたしを叩いてください。それをおねがい

申します。この金子少額はあなたが宗教界につくされる足しにしてくださいませ。

といった意味のものであったのである。

何十年も中外日報を経営しながら、宗教が相手では手元不如意であることを知ったこの老門主の心づかいに、涙骨社主も涙してよろこんだのはもちろんであるが、ステッキを贈って自分の鞭撻を求めたこの門主の心の美しさに感激したもののようであった。

いつまでも社主の部屋の片すみにこれをおいて、智海門主の心を味わったものであった。

晩年この門主が知恩院を退山するときも、涙骨社主に相談したらしく、また東大病院に入院していたこの老門主を度々たずねたのはもちろんであるが、高血圧と脳軟化症のためにあまり口もきけなかった門主とよく手を握り合ったり、また退院の日に堺の自坊旭蓮社まで車で送った二人の交友はまことに美しいものがあった。

この老門主にしてなおこの心もちがあったのは、その人柄がしのばれるのである。

(終)

編集後記

◎本年もさまざまな事件が生じ、喜んだ人泣いた人、いろいろですが、これとて常々のことでございます。弊誌もここに本年最後の発行となりましたが、いつも年頭には大きな命題を掲げながら仲々思うにまかせず、発行日も一定せず読者の皆様にはご迷惑のかけつけ、誠に申訳けございません。

◎そんな折、一読者より次のような便りが寄せられました。

「浄土誌を愛し、話し合いの場としよう。」

雑誌浄土は法然上人鑽仰会員の為にある、何ものにも拘束されない自由な雑誌であります。この浄土には毎号諸先生方の信仰に関する有益なご意見が載っておりますが、

りますが、鑽仰会員の意見も、また自由に発表するところができます。

私達は信仰に関し、特に念仏に就いて先祖から伝えられていた事、あるいはその地方だけにある珍らしい行事、あるいは世間についている言葉や行事について人にも聞かせてあげたいと思う事、あるいは自分も知りたいと思うことなど考えますと、誰でも種々の想い出があります。それらを浄土の読者の声、はがきでひとことの欄へ、どんな小さなことでもお互いに寄せあいまして、疑念については諸先生方にご説明をお願いし、又珍しい事柄などはそれにより見聞を広めるような事ができましたら浄土が本当に私達の雑誌として、一層楽しい価値あるものになると思います。

浄土宗開宗八百年も間近がであります故、それまでに、より充実した内容と現在に倍する鑽仰会員の拡充を見たいものであります」

以上まことに心強い内容の便りでございます。逆にみれば私共編集人のいたらぬ点を指摘されたことにもなります故、肝に銘じより一層の努力をいたす所存でございます。

◎まことに申しにくいことではあります。諸事情により会費を値上げせざるを得ないこととなり、年七二〇円から一千円にさせていただきます。ただたく存じます。ご了承下さいませ。なおすでに来年度以降の会費を納入済みの方はその会費切れより新会費を納入下さいませ。

◎本年も残りわずかとなりましたが、会員各位良き新年をお迎え下さいませ。

「浄土」講読規定

一部 定価 六十円

会費一カ年 金七二〇円

(送料不要)

浄土

十二月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十四年十一月二十五日印刷
昭和四十四年十二月一日発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行人 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会

◇浄土トラクト◇

浄土宗のおしえ（五版） 宮林昭彦著 価30. 円15

一枚起請文をめぐって 村瀬秀雄著 価120. 円35

選択集私解 竹中信常著 価120. 円35

ものいう石 竹中信常著 価150. 円45

多数お申込みには割引いたします。施本にご利用下さい。

発行所 法然上人鑽仰会 TEL (262) 5944
振替東京 82187

〓御年始のご挨拶がわりに御用を〓

「修養ひめくり」 価100円・送料55円用紙33枚
タテ37cm・ヨコ13cm

会員のかたは車価85円 送料実費（見本は150円お送り下さい）

『浄土宝暦』 価30円・送料25円 40ページ

50部以上より単価22円 送料実費

東京都千代田区飯田橋1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944 番

宮林昭彦著

「極楽に生きる」 定価260円・送料50円

宗祖さまのご生涯を通して現代に生きる私たちに
指針を与える好著

~~~~~  
御希望の方は弊会まで申し込み下さい